

付編)

貝塚市出土の瓦器編年試案

勝 浦 康 守

1. はじめに

瓦器塚研究において、資料を統計的に分析し、議論しようとする試みは、1961年、稲垣晋也による編年研究(1961)にはじまる(註1)。以来、白石太一郎(1969, 1975, 1977)が瓦器塚の生産と流通について論を進め(註2)、さらに橋本久和が瓦器塚の地域色と分布圏(1980a)を提示し(註3)、樋口吉文(1978)、尾上実(1978, 1983)、鈴木秀典(1982)らが、それぞれ畿内各地域における瓦器塚の編年研究の成果を発表している(註4)。

編年研究は、当初から、瓦器塚の形態と調整との差異を結びつけて論じようという方向を目指していた。それは、法量の矮小化とヘラミガキ調整の粗略化が瓦器塚の型式変化に一貫してみられる傾向であると考えられたからである。また、畿内を中心とする中世遺跡において、多量かつ、普遍的にみられる瓦器塚の編年研究を先学が志向したことは、とりわけ遅れていた中世の遺構・遺物の研究に対し、考古学的立場から先駆的な役割を担ったものであった。

本稿においては、貝塚市域出土の資料を取り扱い編年を試みることにするが、それは、貝塚市王子遺跡発掘調査(1986)(註5)での検出遺構の時期推定および、遺構の変遷を追うための一手段であり、また、一地方一地域の日常雑器類を通して中世社会の様相を考えるための基礎作業である。

2. 分析資料と分析

本稿で取り扱う資料は、貝塚市域に所在する遺跡の中で、沢所在の澱池遺跡(1984)、沢城跡(1986)、地蔵堂および王子所在の王子遺跡(1986)の出土遺物のうち、320点についてである(註6)。遺物の内訳は、瓦器塚131点、瓦器小皿62点、土師器小皿102点、土師器大皿25点である。

貝塚市域で主に出土する瓦器塚は、橋本久和(1980a)が称する和泉型にあたる。瓦器

坑の編年方法は、先学の諸編年と同様、口径・器高・高台径の縮小化とヘラミガキ調整の差異で変化の流れを追うものである。一方、瓦器小皿、土師器小皿・大皿の型式変化は顕著に観察されず、また、調査時において、単一時期の遺構での瓦器坑との共伴例に乏しく一括遺物としてとらえられる場合が多いことなどから、その編年作業は容易なことではない。しかしながら、橋本久和（1980b）は、瓦器坑との共伴において、土師器皿に対しても、口径・器高の分析を行いうる見通しを得ている（註7）。そして、本稿においても、総資料に対する口径・器高の分析は重要な位置を占めるものであり、今回5mm毎の間隔で階級設定を試みた（表1）。瓦器小皿、土師器小皿・大皿は、この階級差と瓦器坑との共伴例をもとにして編年を試みることにした。

なお、時期区分および、その実年代観については、同じ和泉型瓦器坑の編年を試みている鈴木秀典（1982）に基づくものとした。（註8）。

3. 分析結果

I 期

現在、貝塚市域での出土例はない。大阪市長原遺跡出土例（1982）によると、外面は4～5分割の規則性をもつヘラミガキ（波状ミガキ）が施され、ミガキ調整以前にヘラケズリが施される。内面は、規則性をもつヘラミガキが全体に緻密に施される。口径・器高・高台径について概観してみると、口径15.5～16.5cm、器高6.1～6.5cm、高台径6.6～8.0cmの間に分布し、特に、器高・高台径に関しては他の時期に類をみないものである。

II-1 期

現在、貝塚市域での出土例はない。大阪市長原遺跡出土例（1982）によると、外面は波状ミガキの形態には変化はみられないが、ミガキの緻密性が薄れ、その密度が低下しはめる。それは、内面ヘラミガキにも同様にみうけられる。また、内面底部でヘラミガキの文様化がみられはじめる。口径・器高・高台径が安定し、プロポーションが画一化されつつある。

II-2 期

瓦器坑は5点、全体の3.8%を占める。口径14.6～15.5cm、器高5.1～6.0cm、高台径5.1～6.5cmの間に分布する。平均口径15.2cm、平均器高5.3cm、平均高台径5.7cmである。瀬池遺跡（1984）SE-1出土例（1～5）は、口径・器高・高台径の各々が高い数値を示し、そのプロポーションは資料中で第1位的である。外面ヘラミガキは、波状ミガキの形

態が崩れ、分割・規則性の意識が薄れている。同時に、ミガキの密度の低下も進行している。内面ヘラミガキは、前面密に施されているが規則性はみられない。貝塚市域では現在、最古の型式である。

II—3期

瓦器埴は10点、全体の7.6%をしめる。口径14.6～15.5cm、器高4.6～6.0cm、高台径5.1～5.5cmの間に分布する。平均口径15.2cm、平均器高5.3cm、平均高台径5.2cmである。平均値でみるII—2期からII—3期への縮小率は、高台径で8.8%の縮小がみられるだけである。外面ヘラミガキは、波状ミガキの形態が完全に崩れ、分割・規則性はみられない。ミガキの密度の低下はさらに進行している。内面ヘラミガキは、ミガキの密度は低下しているが、依然として内面全体に施され、器面調整として機能している。出土例として、王子遺跡(1986)SD—321(202～204)がある。

瓦器小皿は3点、全体の4.9%を占める。口径9.6～10.0cm、器高2.1～2.5cmの間に分布する。平均口径9.9cm、平均器高2.1cmである。出土例として、王子遺跡(1986)SD—321(213～215)がある。

土師器大皿は3点、全体の12%を占める。口径15.1～16.0cm、器高2.6～3.0cmの間に分布する。平均口径15.5cm、平均器高2.85cmである。出土例として、王子遺跡(1986年)SD—321(230～232)がある。

III—1期

瓦器埴は20点、全体の15.2%を占める。口径13.1～16.1cm、器高4.6～6.1cm、高台径3.1～6.0cmの間に分布し、口径15.1～16.1cm(60%)、器高4.6～5.0cm(70%)、高台径4.6～5.0cm(70%)で集中する傾向がある。平均口径15.2cm、平均器高5.1cm、平均高台径4.8cmである。平均値でみるII—3期からIII—1期への縮小率は、口径の変化はなく、器高3.8%、高台径7.7%であり、瓦器埴の形態変化に顕著な動きはみられない。外面ヘラミガキは、口縁部付近で単発的に施され、粗略化し尽くした感がある。また、ミガキの施されないものが出現する。内面ヘラミガキは、ミガキの密度の低下が進行するが器面調整として機能しているものと、内面底部にミガキの文様を施したものがある。内面底部に文様をもつものは13点(65%)で出現時からすでに過半数を占める。文様の種類と割合は、斜格子文7点(52.8%)、平行線文4点(30.8%)、連結輪状文2点(15.4%)である。出土例として、澱池遺跡(1984)SE—2(2)、王子遺跡(1986)SE—301(171)がある。

瓦器小皿は 12 点、全体の 19.7% を占める。口径 9.1~10.5cm、器高 1.6~2.5cm の間に分布する。平均口径 9.6cm、平均器高 1.6cm である。出土例として、王子遺跡 (1986) S D-321 (216・217)、S E-301 (177)、S K-301 (260) がある。

土師器大皿は 2 点、全体の 8% を占める。口径 14.1~14.5cm、器高 2.6~3.0cm の間に分布する。平均口径 14.4cm、平均器高 2.7cm である。出土例として、王子遺跡 (1986) S E-301 (187・188) がある。

Ⅲ-2 期

瓦器碗は 29 点、全体の 22.1% を占め、量的ピークに達する。口径 14.1~16.1cm、器高 4.1~5.0cm、高台径 3.6~6.0cm の間に分布し、口径 14.1~15.0cm (82.7%)、器高 4.6~5.0cm (82.7%)、高台径 4.1~5.0cm (69%) で集中する傾向がある。平均口径 14.8cm、平均器高 4.7cm、平均高台径 4.6cm である。平均値にみるⅢ-1 期からⅢ-2 期への縮小率は、口径 6.7%、器高 7.4%、高台径 4.2% であり、比較的停滞的であった瓦器碗の形態変化に動きがみられはじめる時期である。外面へラミガキの施されるものは存在しない。内面へラミガキは、内面底部に文様化されたミガキと、それを取り巻くように体部に施される 13~15 条の圈線ミガキとの組み合わせで構成される。この構成パターンは、以後、Ⅳ-2 期に至るまで続く。内面底部に文様をもつものは、28 点 (96.6%) で、圧倒的存在を示す。文様の種類と割合は、斜格子文 9 点 (32.1%)、平行線文 2 点 (7.1%)、連結輪状文 16 点 (57.2%)、渦巻状文 1 点 (3.6%) で、連結輪状文が斜格子文に取って代わる。出土例として、澁池遺跡 (1984) S E-5 (4・14) がある。

瓦器小皿は 15 点、全体の 24.6% を占める。口径 8.6~9.5cm、器高 1.6~2.5cm の間に分布する。平均口径 9.1cm、平均器高 1.8cm である。出土例として、王子遺跡 (1986) S D-321 (223) がある。

土師器小皿は 4 点、全体の 3.9% を占める。口径 9.1~10.0cm、器高 1.1~2.0cm の間に分布する。平均口径 9.4cm、平均器高 1.6cm である。出土例として、澁池遺跡 (1984) S E-2 (16)、S E-5 (76・78) がある。

土師器大皿は 13 点、全体の 52% を占め、量的ピークに達する。口径 13.1~14.0cm、器高 2.1~3.0cm の間に分布する。平均口径 13.8cm、平均器高 2.6cm である。出土例として、王子遺跡 (1986) S E-301 (189・190) がある。

Ⅲ-3 期

瓦器碗は 20 点、全体の 15.2% を占める。口径 12.6~15.5cm、器高 4.1~4.5cm、高台径

2.6 ～ 5.5cmの間に分布し、口径 14.1～15.5cm (95%)、高台径 3.6～5.0cm (85%) で集中する傾向がある。平均口径 13.9cm、平均器高 4.2cm、平均高台径 4.2cmである。平均値にみる III-2 期から III-3 期への縮小率は、口径 6.1%、器高 10.6%、高台径 8.7% である。口径に比して器高の縮小率が優位であり、器高縮小に伴う法量変化がみられる。III 期を通して、瓦器碗の形態変化に急激な変化はみられないが、着実に縮小化をたどっている。内面ヘラミガキは、圏線ミガキの密度が低下しはじめる。内面底部の文様と割合は、斜格子文 4 点 (22.1%)、平行線文 3 点 (16.7%)、連結輪状文 10 点 (55.6%)、渦巻状文 1 点 (6.6%) である。III-2 期と比較して、資料体数に差があり 明確ではないが、斜格子文が減少するのに対して連結輪状文は、以前として過半数を保っている。出土例として、王子遺跡 (1986) S E-201 (36)、S E-301 (246)、S K-301 (244) がある。

瓦器小皿は 22 点、全体の 36.1% を占め、量的ピークに達する。口径 8.1～9.5cm、器高 1.1 ～ 2.0cm の間に分布する。平均口径 8.6cm、平均器高 1.6cm である。出土例として、王子遺跡 (1986) Pit-304 (167 ～ 169)、S K-301 (254) がある。

土師器小皿は 30 点、全体の 29.1% を占める。口径 8.1～9.0cm、器高 1.1～2.0cm の間に分布する。平均口径 8.5cm、平均器高 1.5cm である。出土例として王子遺跡 (1986) S E-301 (180～183・185・186) がある。

土師器大皿は 4 点、全体の 16% を占める。口径 12.1～13.0cm、器高 2.6～3.5cm の間に分布する。平均口径 13.0cm、平均器高 2.9cm である。出土例として、王子遺跡 (1986) S E-301 (193) がある。

IV-1 期

瓦器碗は 22 点、全体の 16.8% を占める。口径 12.1～14.0cm、器高 2.1～3.5cm、高台径 2.5～4.0cm の間に分布し、口径 12.6～13.0cm (54.5%)、高台径 3.1～4.0cm (68.1%) で集中する傾向がある。平均口径 12.2cm、平均器高 3.1cm 平均高台径 3.2cm である。平均値にみる III-3 期から IV-1 期への縮小率は、口径 12.2% 器高 26.2%、高台径 23.9% で、III-3 期までの安定した変化率と比較して III-3 期から IV-1 期への変化率は極めて急激である。口径の変化率は、III 期を通じての変化率の 2 倍にあたり、器高・高台径に関しては 2 倍以上の数値をとる。瓦器碗の形態変化の中で一大画期点となる。内面ヘラミガキは、4～5 条の圏線ミガキが施され、ミガキ密度の低下は進行している。内面底部の文様と割合は、平行線文 1 点 (6.7%)、連結輪状文 9 点 (60%) 渦巻状文 5 点 (33.1) である。斜格子文が消失し、新たに渦巻状文が増加の傾向にある。出土例として、王子遺跡 (1986)

S E-201 (43・46・47) がある。

瓦器小皿は 66 点、全体の 9.8% を占める。口径 7.6~8.0cm、器高 1.1~2.0cm の間に分布する。平均口径 7.7cm、平均器高 1.5cm である。出土例として、王子遺跡 (1986) S E-201 (48・49・50) がある。

土師器小皿は 41 点、全体の 39.8% を占め、量的ピークに達する。口径 7.1~8.5 cm、器高 1.0~2.0cm の間に分布する。平均口径 8.0cm、平均器高 1.4cm である。出土例として王子遺跡 (1986) S E-201 (53・57・61)

Ⅳ-2 期

瓦器碗は 17 点、全体の 13% を占める。口径 11.1~12.0cm、器高 2.6~3.5cm、高台径 2.6~3.5cm の間に分布し、口径 11.1~11.5cm (76.4%)、器高 2.6~3.0cm (47%)、高台径 2.6 ~ 3.0cm (90%) で集中する傾向がある。平均口径 11.4cm、平均器高 2.9cm、平均高台径 2.8cm である。平均値にみるⅣ-1 期からⅣ-2 期への縮小率は、口径 6.6%、器高 6.5%、高台径 12.5% で、再び、安定した変化率に戻る。内面ヘラミガキは、文様と、圏線ミガキで構成されるパターンの最終段階である。また、高台の消失したものが出現する。内面底部の文様と種類の割合は、平行線文 1 点 (9.1%)、連結輪状文 4 点 (36.4%)、渦巻状文 6 点 (54.5%) である。出土例として、王子遺跡 (1986) S E-202 (86) Pit - 245 (112) がある。

瓦器小皿は 3 点、全体の 4.9% を占める。口径 7.1~8.0cm、器高 1.0~1.5cm の間に分布する。平均口径 9.6cm、平均器高 1.2cm である。出土例として、王子遺跡 (1986) S E-201 (50) がある。

土師器小皿は 18 点、全体の 17.5% を占める。口径 6.6~8.0cm、器高 1.0~2.0cm の間に分布し、平均口径 7.1cm、平均器高 1.3cm である。出土例として、王子遺跡 (1986) S E-201 (60・63)、S E-202 (88・89・91) がある。

土師器大皿は 2 点、全体の 8% を占める。口径 11.6~12.0cm、器高 1.6~2.5cm の間に分布する。平均口径 11.65cm、平均器高 1.9cm である。出土例として、澱池遺跡 (1984) S K-10 (8) がある。

Ⅳ-3 期

瓦器碗は 4 点、全体の 3.1% を占める。口径 10.6~11.0cm、器高 2.6~3.0cm、高台径 2.6~3.5cm の間に分布する。平均口径 10.85cm、平均器高 2.8cm、平均高台径 2.8cm である。平均値にみるⅣ-2 期からⅣ-3 期への縮小率は、口径 4.8%、器高 3.8%、高台

径は変化なしであり、変化率は極めて小さく、瓦器碗の形態変化は、ほぼ停止状態になる。内面ヘラミガキは、底部の文様が消失するものが出現する。また、体部と底部のミガキが一体化したような3～4重の輪状ミガキが施される。出土例として、澱池遺跡（1984）S E-3（2）、王子遺跡（1986）S E-202（87）がある。

土師器小皿は9点、全体の8.7%を占める。口径6.5～7.0cm、器高1.1～1.5cmの間に分布する。平均口径6.7cm、平均器高1.3cmである。出土例として、王子遺跡（1986）S E-202（90）がある。

V 期

瓦器碗は4点、全体の3.1%を占める。口径10.1～11.0cm、器高2.6～3.5cmの間に分布し、高台をもつものは存在しない。平均口径10.7cm、平均器高2.8cmである。平均値にみるⅣ-3期からⅤ期への縮小率は、口径1.4%、器高変化はなしで、形態変化はみられない。内面ヘラミガキは、ミガキが全く施されないものが出現する。焼成時における炭素吸着も不十分である。出土例として、沢城跡（1986）包含層（1）がある。

4. 結 論

今回、貝塚市域出土の資料について編年を試みた結果、Ⅱ-2期～Ⅴ期に至る変化の流れを設定することができた。その中で、特に、瓦器碗の変化の流れに大きな2つの画期がみられた。一つは、Ⅲ-1期以降の内面底部でのヘラミガキの文様化であり、一つは、Ⅲ-3期とⅣ-1期の間でみる形態変化の大きな間隙である。

瓦器碗の内面底部にみるヘラミガキの文様は、楠葉型ではⅠ期に、また、同じ和泉型瓦器碗が出土する大阪市長原遺跡でもすでにⅡ-1期にみられる。これらに対して、貝塚市域出土の瓦器碗は、Ⅲ-1期で文様化がみられ、それ以前の内面ヘラミガキは、器面調整として機能しているものである。このことは、貝塚市域出土瓦器碗の1つの特徴とみることができる。図1は、ヘラミガキ文様の変化を示したものである。各文様の変遷および各期での優劣関係がみられ、変化の仕方において2つのグループに分けられる。1つは斜格子文・平行線文組で、1つは、連結輪状文・渦巻状文組である。それは、前者が突然高い比率で出現し、以後、急速に減少するのに対して、後者の連結輪状文は、増加→安定→減少、渦巻状文は増加→（減少）という過程を踏まえて変化をみせる。内面底部に施されたヘラミガキの文様は、個々の文様が瓦器碗の新旧関係を左右するのではなく、各文様は独自に瓦器碗の変化の流れに存在する。瓦器碗の形態変化は、その出現時より直線的に進行するが、ヘラミガキの文様は直線的な動きの中で、各文様が時間的に重複しながら、その存

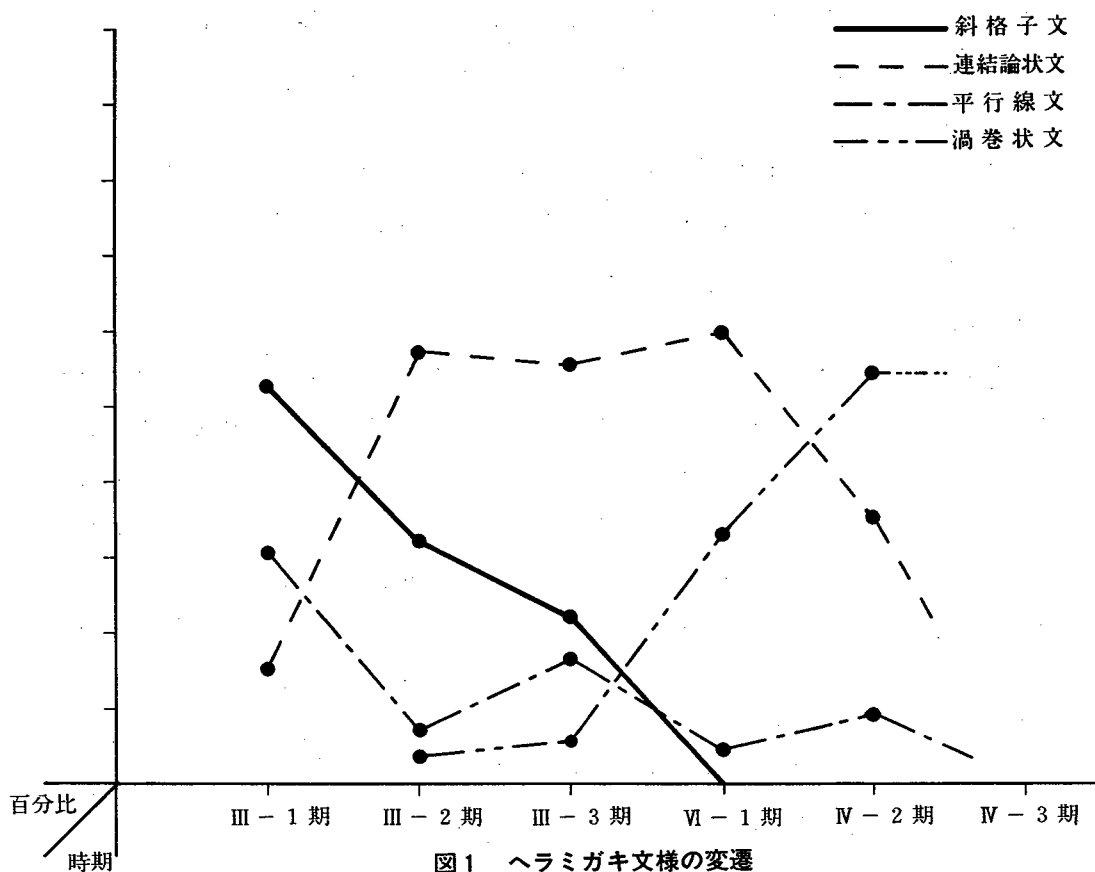


図1 ヘラミガキ文様の変遷

亡をみせ曲線的な動きをとる。すなわち、法量の矮小化という第一前提の下で、各文様をもつ瓦器埴は、各々が全く異なる系統の体制下で生産された可能性が考えられる。図2は、瓦器埴の時期毎の量的比率を示したものである。Ⅲ期該当の瓦器埴は、全体の52.7%を占め、爆発的な増加をみせる。また図6は、瓦器埴の口径・器高・高台径の度数分布を示したものである。量的増加の顕著なⅢ-1期～Ⅲ-3期の分布範囲は、広い範囲で重複しており、Ⅲ期該当の瓦器埴の形態は画一化の傾向がみられる。ここに、画一的大量生産、すなわち、大量消費商品としての瓦器埴の登場が想定される。また、Ⅲ-1期にみる斜格子文・平行線文の存在状況は、それらの文様をもつ瓦器埴の需要がピークもしくは、それを越えて減少に向かう時期にあたっていれことを示すものとし、この時期にはじめて、商品としての瓦器埴がもちこまれたと考えるのが妥当ではないかと思われる。

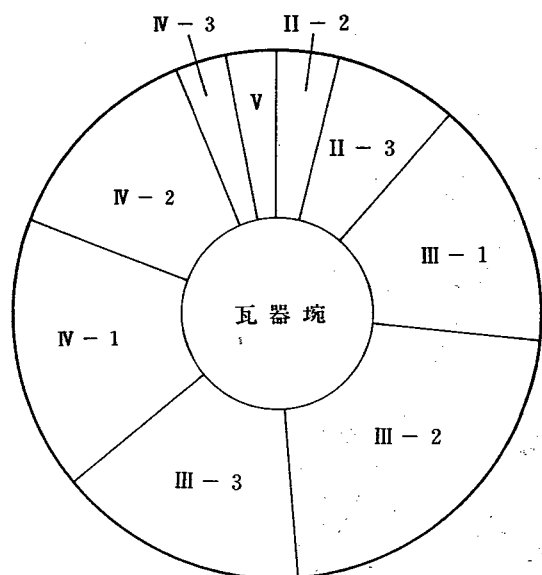


図2 瓦器碗の時期区分

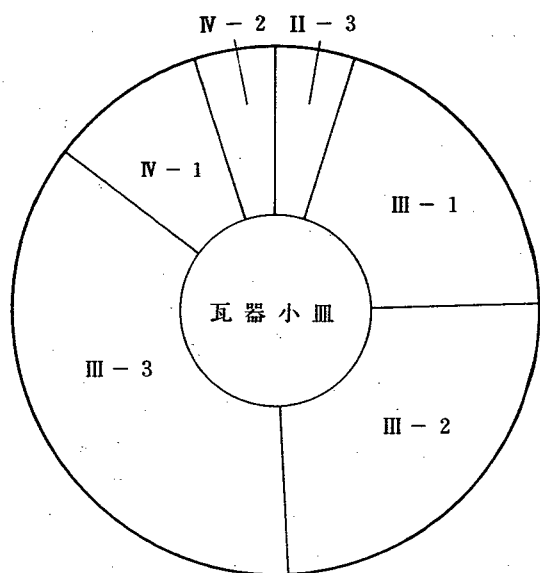


図3 瓦器小皿の時期区分

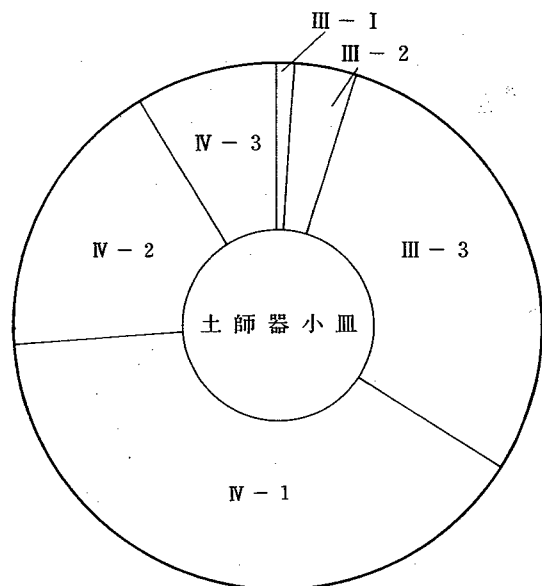


図4 土師器小皿の時期区分

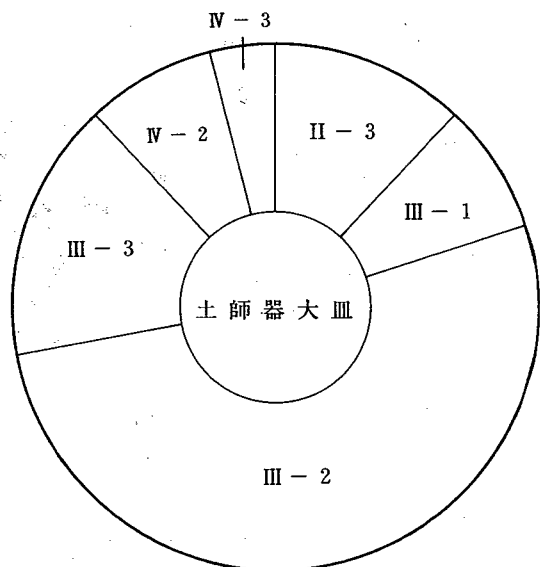


図5 土師器大皿の時期区分

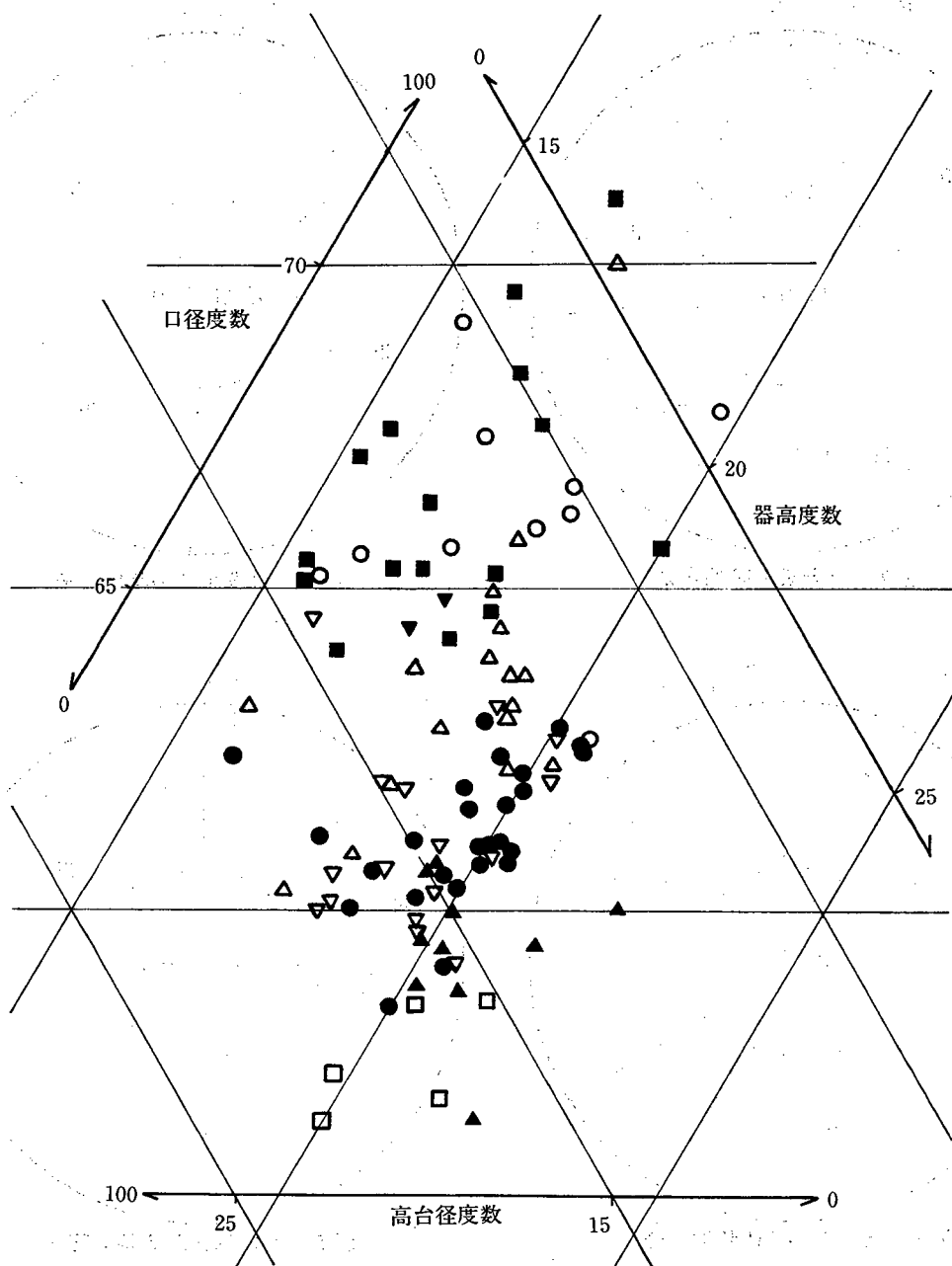


図6 瓦器埴の口径・器高・高台径度数分布

口径(cm) 器高(cm)	6.5	6.6	7.1	7.6	8.1	8.6	9.1	9.6	10.1	10.6	11.1	11.6	12.1	12.6	13.1	13.6	14.1	14.6	15.1	15.6	16.1	合計
以下																						
1.0																						
1.1				1																		1
以下				1	1																	2
1.1				2	3	3	4	1														13
1.5	1	13	9	14	18	13		1														69
1.6																						
2.0				3	7	7	12	6	1													36
2.1																						
2.5																						
2.6																						
3.0																						
3.1																						
3.5																						
3.6																						
4.0																						
4.1																						
4.5																						
4.6																						
5.0																						
5.1																						
5.5																						
5.6																						
6.0																						
6.1																						
以上																						
	1	16	15	26	40	33	21	11	2	8	13	10	4	15	6	13	19	26	29	9	3	320

表1 瓦器碗・瓦器小皿・土師器小皿・土師器大皿の口径と器高

(上段・瓦器碗、中段・瓦器小皿、下段・土師器小皿、下段○印・土師器大皿)

瓦器碗の形態変化は図6にみるように、各期における分布は、広い範囲での重複を繰り返しながら、徐々に縮小化の傾向にある。また、隣接する各期での変化率が、極めて小さい数値をとることも知り得た。しかしながら、唯一、Ⅲ-3期とⅣ-1期の間では、瓦器碗の変化の流れに大きな段差が生じている。この移行期には、碗以外の器種にも変化がみられる。図3・4は、瓦器小皿と土師器小皿の時期毎の量的比率を示したものである。Ⅲ期まで85.3%と高い比率を示していた瓦器小皿がⅣ期以降14.7%と減少し、代わって、Ⅲ期まで34%と低い比率を示していた土師器小皿がⅣ期以降66%と増加を示し、両者の量的関係が逆転する。さらに、図5は、土師器大皿の時期毎の量的比率を示したものである。資料不足ではあるが、Ⅲ期まで88%と高い比率を示し、Ⅳ期以降は12%と激減をみせる。このような様相の下で制作されたⅣ-1期の瓦器碗（平均口径12.2cm、平均器高3.1cm）はⅢ期の瓦器碗（平均口径14.7cm、平均器高4.7cm）と瓦器小皿（平均口径9.0cm、平均器高1.7cm）のほぼ中間形態を示している。

土師器大皿は、資料体数の不足から、特にⅣ期以降の様相については明瞭ではない。土師器大皿は、器高に顕著な変化をみせず、口径および量的増減関係において瓦器碗の変化にはほぼ同調する。そこで、瓦器碗の変化率を土師器大皿にあてはめ、資料を欠くⅣ-1期の土師器大皿を想定してみると、その平均口径は12.0cm、平均器高は2.6cmとなり、Ⅲ-3期まで器高で大きな隔たりが生じていた両者が、Ⅳ-1期ではほぼ同形態に至ると考えられる。

このように、Ⅳ期には、従来の瓦器碗と瓦器小皿の形態を同一視させた「瓦器碗」の登場が考えられる。さらに、この「瓦器碗」は土師器大皿を継承するものであったと推測される。ここに、従来、その形態・機能において分化が行われていた伝統的な個々の供膳形態を全く無視した「万能雑器」としての瓦器碗を想定したい。それはⅣ期以降の供膳形態において、瓦器碗・土師器小皿という極めて単純な器種構成に象徴されるかのようである。

そして、このような様相は、当時の窯業生産システムに何らかの変容を認めざるを得ないものである。

今後、良好な条件化での資料の蓄積をまち、貝塚市域の瓦器碗の編年確立をはかるとともに、実証主義的な議論がより必要とされるであろう。

- (註1) 稲垣 晋也(1961)「法隆寺出土の瓦器塚——瓦器塚の編年試論——」、『大和文化研究』第6巻第4号、p p 19~34。
- (註2) 白石太一郎(1969)「いわゆる瓦器に関する2・3の問題——古代末~中世初頭における土器の生産と流通に関する一考察」、『古代学研究』第54号、p p 1~29。
- 白石太一郎(1975)「『瓦器』の生産に関する2、3の覚え書」、『古代文化』第27巻第1号、p p 1~12。
- 白石太一郎(1977)「越智氏居館跡出土の瓦器——瓦器の終末年代に関して——」、『古代学研究』第85号、p p 24~31
- (註3) 橋本 久和(1980a)「瓦器塚の地域色と分布」、『上牧遺跡発掘調査報告書』大阪、p p 94~105。
- (註4) 樋口 吉文(1978)『新金岡町所在遺跡発掘調査抄報(中世墓地の調査)』、大阪。
- 尾上 実(1978)『挟山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要——藤井寺市野中・羽曳野市軽里所在——』、大阪。
- 尾上 実(1983)「南河内の瓦器塚」、『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』所収、大阪、p p 689~705。
- 鈴木 秀典(1982)「2)瓦器塚の編年」、『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告II』、大阪、p p 278~284。
- (註5) 西岡 巖・勝浦康守(1986)『王子遺跡発掘調査概要II、第3次調査』、大阪。
- (註6) 西岡 巖(1984)『貝塚市遺跡群発掘調査概要IV』、大阪。
- 西岡 巖(1986)『貝塚市遺跡群発掘調査概要VIII』、大阪。
- (註7) 橋本 久和(1980b)「高槻における中世土器の編年」、『上牧遺跡発掘調査報告書』、大阪、p p 86~93。
- (註8) 鈴木秀典は、瓦器塚の変化の流れをI~V期に大きく分け、II~IV期を各々3小期に細分している。また、実年代観については、I期を11世紀中葉から約半世紀間、II、III、IV期を12、13、14世紀とし、V期を15世紀前半に想定している。